

稲城に着いたら、どこに宿を取るかは決めていた。成都に滞在していた時、すでにその宿の名刺を手に入れていた私は、バスが稲城に辿り着く前にはそれを取り出して、しっかり手に握りしめていた。

私が成都で滞在していたのは、バックパッカーと呼ばれる大きなザックひとつで自由に旅するようなスタイルの旅行者に向けた、日本でいうユースホステルのような感じの場所だった。

帰国する間に突然居残りを決めたため事前の準備も無く、右も左も解からない成都でガイドブックさえ持っていない私を見かねたのか、それまで四姑娘山で案内役としてお世話になっていた、『わんりい』でも(四姑娘山の自然紹介で)おなじみの大川健三さんが、そこなら安心して滞在できるからと紹介して下さったのだ。

中国では青年旅舎などと呼ばれているそのような宿は宿泊料金も安く、私のような一人旅の旅行者にとっては訳のわからない一般の宿に泊まるよりずっと安全だ。旅行者が大勢集る場所なので旅の情報なども提供してもらえたと、中でもドミトリーと呼ばれる大部屋は与えられたベットの上だけが個人のスペースだが、格安料金で泊まる事ができる上に、同じようなスタイルで旅している同室の旅行者達とひととき互いの旅の話に花を咲かせることもできて、なかなか楽しかった。

その成都の宿ではフロント脇に中国各地の青年旅舎の名刺が並べて置いてあり、宿泊者が必要に応じて自由に取っていけるようになっていた。そこで稲城の『亜丁青年旅舎』の名刺を見つけた時は、思わず飛び上がってしまった。

何しろ稲城といえば、成都からバスで三日がかりの(実際には二日で着いてしまったが)四川省の山奥の奥の、山賊のような男たちがウロウロしているような田舎街だ。(と思っていた)そんな場所で土地勘もなく、私が一人で泊まれるような宿が見つけれられるのだろうか……。しかも稲城から車で三時間程の亜丁まで公共のバスは無く、自分で車をチャーターしなければならないという。一人旅の私が車をチャーターするには、一緒にシェアできる仲間を探さなければならないだろう。果たしてそんな仲間が上手く見つかるだろうか……。四姑娘山メンバーと別れ一人きりになったばかりで、私も人並みの不安は感じていたのだ。

いつになく心細い気持ちになっていたのが、その名刺



を手にしたとたんいつもの気楽な私に立ち返り、これで稲城でも安心して泊まれる〜!旅人の集る青年旅舎なら亜丁までの車をシェアする仲間もたやすく見つかるに違いない!と、嬉しさのあまり意味もなく三枚も名刺を取ると大事にパスポートに挟んで持っていたのだ。

しかし喜びの反面、戸惑いも感じて私の気持ちは複雑だった。三年前に私が始めて訪れた頃、あの辺りの土地は外国人に開放されたばかりで、知っている人はまだ少ないとの事だった。当事買い求めた四川省の地図でも、亜丁はかろうじて名前が載っているかいないか程度の場所だったが、それが今や、稲城には亜丁目当ての旅客にむけた青年旅舎などもできてしまう程にポピュラーな観光地になっているのだろうか……?

心の中で想いつづけていた亜丁は『知る人ぞ知る特別な場所』のように思っていた私は、何だか少し拍子抜けする感も否めないまま、それでも山賊の街でとりあえず身の安全が保障された事に対して安堵の吐息をついたのだった。

内心の興奮を隠してぼんやりと窓の外の風景を眺めているうちに、バスはとうとう稲城に着いた。ついに、ついにここまで来たんだ〜。感慨にふけろうとしたその時、まだ完全に停車していないバスの側面に突然ワラワラと人が群がってきた。

「亜丁! 亜丁! 亜丁に行くか!? 車はあるのか!」

「亜丁に行くよ! 亜丁に行くよ!」

「亜丁! 亜丁! 亜丁!」

バスから降りると、男たちが寄ってきて「亜丁に行くのか?」と尋ねてくる。

「うん、行くよ」

「何人だ」

「一人だけど」

「え、一人だけ? (少し落胆)、いつ行くんだ?」

「まだ決めてない」

「垂丁に行くなら電話してくれ」

男は私に名刺を手渡すと素早く別の乗客の方に向かっていった。

あっけにとられている間に数人の男たちが寄って来ては同じ会話を繰り返し、あつと言う間に私の手には数枚の名刺が握らされている。どこかのインスタント名刺屋で作られたものらしく、デザインはどれも同じで車の絵に名前と携帯電話の番号が印刷されているだけのものだ。どれが誰のかわからない。

何じゃ、こりゃ〜。車のチャーターなんてどうすればいいのかと思っていたが、向こうから営業にやってくるのか。それにしてもこの様子じゃ、垂丁はすっかり観光地になっているみたいじゃないか。

憧れの稲城に着いたとたん、思いがけない奇襲攻撃にあっけこ面食らっていると、背の低いプックリとした少女が話しかけてきた。

「今日の宿は決まっていますか? 良い部屋があるんだけど」

パッチリした目がとても可愛い。まだ幼さの残る彼女の姿に警戒を解きバスの中から握っていた、垂丁青年旅舎の名刺を差し出して見せると

「ここに行きたいんだけど、どこにあるのかな?」

と尋ねてみた。

「私の紹介する宿の方が近くていいよ。そっちに来ませんか?」

「ううん、私はここに泊まりたいの。どこにあるか教えてください?」

私が重ねて言うと、彼女はアッサリと「じゃあ私が案内してあげる」と先に立って歩き出した。

「あなたは一人で来たの?」

並んで歩きながら彼女が尋ねた。

「うん」

「怖くないの?」

「別に怖くないよ。みんな優しいから」

「あなた、荷物多いねえ。私、手伝ってあげるよ。」

私は大きなザックを背に、小さいザックを胸側に抱くように背負って歩いていたが、彼女が小さい方のザックを取って背負ってくれた。胸の中がキュンとなる。彼女はどこかの宿の客引きだろう。しかし私は彼女の勤めには応じず他の宿に行くというのに、彼女は道案内をしてくれて、荷物

を持つまで手伝ってくれるのだ。

「あなた垂丁に行くの?」

「そうだよ」

「じゃあ、垂丁から戻ったら、私のいるホテルに泊まってね。」

「うん。きっとそうするよ!でも、どこであなたに会えるの?」

「私は毎日、夕方バスターミナルの所にいるよ。」

「あなたの名前は?」

「シャムウ」

街はずれまであるくと垂丁青年旅舎の看板が通りに出ているのが見えてきた。

「あなたの探してる宿はあそこだよ。垂丁から帰ったら私を探してね!」

宿の手前で、彼女は手を振ると今きた道に戻っていった。

シャムウ、シャムウ、可愛い名前だ。シャム猫みたい。彼女の名前を口の中で転がしながら垂丁青年旅舎の門に入る。旅舎にしては人の気配がなく、なんだかガラーンとしていた。一般的な青年旅舎のイメージから、大勢の旅人がお茶などの飲めるテラスでおもいおもいにくつろいでいる風景を想像していた私は、あまりの人気のなさに戸惑いながら事務所を訪ね、泊まりたい旨を告げた。面倒くさそうに出てきたチベット服姿の女性に個室とドミトリーどちらが良いかと聞かれ、ドミトリーを選んだ私が連れて行かれた部屋は、二段ベッドが部屋の両端に三個ずつ並んで計12人が泊まれるようになっているのだが他には誰もいなかった。

これなら個室に泊まるのと同じじゃないか。誰にも遠慮せずにベッドを三つ使って荷物を広げる。それにしても今日この旅社にとまっているのは私一人だけなのかと思える静けさだ。ここで垂丁の情報を聞いたり、車をシェアする仲間を見つけようとしたのは完全にアテが外れてしまった。混みすぎている宿も嫌だが、これじゃなんだか寂しすぎる。さっき別れたシャムウが恋しく思われた。こんな事なら彼女の宿に泊まってあげれば良かったな……。

部屋を出ておもてにある共同の洗面所に向かうと、3、4人、テラスのベンチで座って喋っている人達がいるのが遠くに見えた。他にも泊まっている人がいたらしい。中国人旅行者のようだった。

洗面所の鏡に映った私の顔はひどい事になっていた。髪はボサボサだし、おんぼろバスでの長旅疲れとホコリで目じりにはクッキリ皺が刻まれてる。嫌になっちゃう。

顔を洗って外に出ると夕暮れが近づいていた。考えて

みれば、朝康定のバスターミナル前で水餃子を食べて以来、ロクに食事も取っていない。せっかく辿り着いた稲城の街を歩いても見たかったので、出かけようとしていると、先ほどテラスに座っている人達と話していた男が近づいてきた。

ダブっとしたズボンに白いジャケット。つばのついた丸い帽子を目深にかぶったいでたちは、昭和のチンピラみいだ。

「垂丁にいくの？ 車はあるのか？」

さっきから何度と無く繰り返された会話だ。宿で一息ついたおかげで交渉に入る心のゆとりもできていた。

「いくらで行くの？」

「200元」

「フン！冗談じゃないよ！」

垂丁までの相場は50元くらいだと聞いている。私が会話を打ち切って立ち去ろうとすると、彼はあわてて追いかけてきた。

「待ってよ！ 200元は車一台の値段なんだ。人数が増えたら一人分の料金は安くなる。俺が他の客も探すからさ！」

「ふーん、じゃ私一人で50元ね。で、帰りはどうすればいいの？」

「帰る日を予約すれば、迎えに行くよ」

「じゃあ往復でいくら？」

「90元・・・？」彼が私の目をうかがうように答えた。

「もう一声！」

「じゃあ、80元・・・」

「往復で70元ね。だったら、あなたの車に乗るわ」

駄目もとの強気で値切ってみる私。

「解かったよ。70元でいいよ」

え！？ いいの！？彼はあまり商売は上手じゃないらしい。なかなかお客が見つからないのだろうか。

「でも先にお金を払って、あなたが来なかったら困るよねえ。・・・料金を払うのはいつ？」

彼を軽く睨みながら訊ねる私。

「稲城に戻ってきた時でいいよ」 え！？ ホント！？

「明日行ける？」

「いいよ」

「今夜一晩で、他のお客さんを探せるの？」

「なんとかするよ」

「本当に！？ 絶対だよ～！」

何度も念を押すと、彼と握手して交渉が成立した。

(次号に続く)